第３章　グランドデザインの具体的イメージ

（１）風土の生成

これらのデザイン３領域を統合しながら、その内容を分かり易く風景として演出し、さらに食文化など味覚を含む五感の総合感覚で一層深く直感できるような工夫が求められます。また郷土の過去や遺産を、言葉によってつなぎながら歴史を自覚し、これに加えて文学や芸術による郷土の表現、さらにまた祭りやイベントなど、まちの人々が心に描く風物の共有によって、風土という物語を編み上げる必要があります。

たとえば、先駆植物の特性を生かして、草原のなかに植林されたカラマツは、白秋の歌によって軽井沢の第２の原風景になりました。堀文学や立原の詩は春浅い高原のような淡い文体によって、精神的な癒しの力を秘めた軽井沢を目覚めさせ、高原保養都市という風土遺産へと高めたように思います。

浅間山はただの自然の山ではなく、また一人の人間の想い出でもありません。それは、軽井沢コミュニティに生きる多くの人たちに人生の物語を演じる舞台を用意します。これが風土です。

風土という共同体の神話は、前章で提案した３つのデザイン分野を融合する物語化を経て生まれます。さなぎが蝶へ脱皮するようにまちは生態系の環境システムから心の〝ふるさと″へと飛び移ります。ふるさとは、人々の生きる基底をなしながら、未来への遺産として引き継がれるでしょう。

22世紀風土フォーラムは、このような未来のふるさと化の拠点になります。

用語解説

※8：スマートコミュニティ
情報通信技術（ICT）を活用した、電力の有効利用から地域の交通システムや市民のライフスタイルのあり方までを含む、次世代の社会システム。軽井沢町ではすでに独自のアイディアを盛り込んだスマートコミュニティを推進している。

※9：LRT
Light Rail Transit の略語で、省エネ・バリアフリー性能に優れる新時代の路面電車である。平成 18 年 4 月に開業した富山 LRT では乗降客数が増えるなど高い評価を受けており、人と環境にやさしい地域密着型の公共交通として注目されている。

※10：パーク＆ライド
都市部や観光地の交通渋滞を緩和するために、個人の自動車を郊外の鉄道駅などに用意された駐車場に停め、そこから鉄道や路線バスなどの公共交通に乗り換えて目的地に行く方法である。

※11：コンパクトシティ
歩いて行ける範囲が生活圏になるようにコンパクトな大きさに市街地を維持・再編することで、地域コミュニティの繋がりを高め、住みやすいヒューマンスケールなまちを目指すこと。近年、人口減少とともに再び注目され始めている考え方。

（２）代表的デザイン 20 景

軽井沢の風土イメージの発酵を促すきっかけとして 20 のキーワードを 3 つのグループに分けて説明します。それらは、数字や概念ではなく、なるべく眼に見える物語により、生活スタイルを暗示します。

[風土自治をめざす主な５つの景]

１．演出される風土（社交・共生）

豊かな大地と文化に彩られた軽井沢は、風景デザインの演出効果で美しい共生の舞台になります。たとえば、山水美と祝祭性で賑わう日本の広場、「まちニワ」を創出し都市の顔にしましょう。そこは、人生のハレの舞台です。

２．主役は 22 世紀風土フォーラム（自治）

よどみなく生きて流れる新しい風土をめざし、人々の創造と意欲を刺激する拠点として学習の場（22 世紀風土フォーラム、終章参照）を作りましょう。それは未来の風土の苗床であり、司令塔です。湯川ふるさと公園など、風土自治の演習場はコモンズ（共有地）として把えることもできます。

３．浅間の視線を浴びよ！（大地）

シンボルとしての浅間山は、母なる大地として、また威厳に満ち優れた保養地の守護神として、軽井沢を守り育てた霊山です。浅間山からひろがる山河の地相は自然をこえた永遠の風土遺産といえます。

４．スポーツで結ぶまち、とち、いのち（生命）

高原保養に新しい魅力を盛り付けるなら、それはスポーツ体験と清々しい汗でしょう。母なる大地、心身の元気、地域社会の精気をスポーツが結びつける次世代型軽井沢づくりの焦点になるでしょう。

５．軽井沢モダンというライフスタイル！（創造）

未来の高原保養都市の基調は、明るく澄んだ和的叙情性の軽井沢モダンです。このデザイン思想を都市、建築、交通、食文化、美術･工芸、スポーツの充実など、さまざまな生活の演出へと発展させましょう。

⑨→裏面へ続く

[エリアデザインとしての５つの景]

６．「美しい村」の未来へむけて（旧軽井沢）

７．アートも建築も、風土の襞（ひだ）から生え上がる（新軽井沢）

８．蘇るふるさと、歩け！沓掛、浅間が見てる（中軽井沢）

９．転生する宿場のおもかげ（追分）

10．生命の豊饒（ほうじょう）、はじける元気（南地区）

（６から 10 の各項目の説明は、第４章に詳述します。）

[暮らす・食べる・楽しむ軽井沢の景]

11．縄文の大地を生きる

日本文化の基層が露出している野生の大地で古代史の霊気に触れながら、高原野菜を作る若い夫婦の姿。それは、人類のたくましさであり、軽井沢の“今”のすがたでもあります。農林者は大地の守護者として、産業を越え、風土を支える生活感情の担い手になってください。

12．馬も仲間だ、みんなの野道

全域に残る里山や里川の風景は、これからの軽井沢の魅力を守り育てる上で必須の財産です。子どもも高齢者も、人も自転車も馬も野道、あぜ道、原っぱでまじり合って行き交う姿に、野趣ゆたかな詩情をみましょう。

13．質朴というエレガンス

別荘住民の生活を支え、上質の保養地として育ててきた地元住民は極めて質素と控え目で、そしてたくましい。ここに渋く透明な軽井沢モダンの原点が見えます。保養生活と日常生活の垣根が取り払われて、初めて 22 世紀型の軽井沢の真価が発揮されるでしょう。

14．軽井沢の、冬

ウインタースポーツの普及、大型ショッピングセンターの集客事情なども手伝って“通年型リゾート”という新しい呼び名が付きつつある軽井沢は、冬の魅力を発掘、発展させる時代感覚が求められます。

温暖化現象によって、当地の夏の涼しさが再評価される一方、冬の厳しい寒さが和らぐ方向にあることも見逃せません。

15．籬（まがき）を囲う山の裾、コブシの花の散りかかる…

カラマツの小径と浅間石の石垣、そこに咲く季節の花の散歩道。

軽井沢は日本文学の伝統に従い、山水風月にたくして人生を語り合えるまちです。

16. 風景の元気は有事のそなえ

別荘、水田、里山は平時にあっては美しい風景をつくり、非常時には命を守る役割を果たすでしょう。

この二面特性は、首都圏直下型地震などの自然災害発生時などの避難地やバックアップ機能地として発揮される他、食糧危機などの緊急事態にも役割が期待できます。

17. 食文化の原点は地産地消

新しくできる「軽井沢発地市庭（ほっちいちば）※12」は軽井沢の食の原点を変える力を秘めています。ご飯、味噌汁、卵、サラダ、ハム・・・そして未来の地場産業は衣食住の本モノを求める態度から芽生えます。未来の贅沢は渋い風土性で語られるでしょう。

18. 文学は暮らしと融合して文化になる

堀辰雄、室生犀星、北原白秋、与謝野晶子らの作家や詩人たちは軽井沢に暮らし、滞在して風土に密着した作品を残し、それらは時間という酵母によって熟成されて、今も生活の中に生きづいて、風土文化の原動力にもなっています。

19. 路面電車、軽井沢を走る

ドイツのロマンティック街道は、どこのまちにも古い路面電車が走り、フランスの中小都市も新型の LRT が当り前の今、高原保養都市軽井沢が世界に肩を並べる条件として欠かせない。どこまで伸ばせるか、しなの鉄道との相互乗り入れも含めて、夢の膨らむ構想です。

20. 高原文化圏をつなぐ、風景街道！

白山～御岳山～北アルプス～八ヶ岳～浅間・白根と連なる中央日本地域には７ケ所の日本風景街道が登録されています。食と温泉という共通項でくくることのできるこの高原保養都市帯を結んで、東アジアを代表する高原回遊ルートとして再編集し、世界に発信しましょう。

用語解説

※12：発地市庭

発地地区の新しい農産物等直売施設の愛称。「発地」は軽井沢の農の象徴である地域であり、「市庭」は市場のあえて古典的な表現を使い、古くて新しい軽井沢の歴史・文化を踏まえ、夢のある賑わい空間を創造していくよう想いを込めた。